

『フーツ・アンド・クエリーズ』誌と大辞典の時代
——『オックスフォード英語大辞典』、『イギリス人名事典』、
『エンサイクロペディア・ブリタニカ』と南方熊楠——

志村 真幸

はじめに

一九世紀後半から二〇世紀前半にかけては、イギリスでマレーの『オックスフォード英語大辞典（OED）』、『イギリス人名事典（DNB）』、『エンサイクロペディア・ブリタニカ（EB）』第九版、ドイツでグリム兄弟による『ドイツ語辞典』、オランダで『オランダ語辞典』、フランスでリトレの『フランス語大辞典』、『ラルース大百科事典』、アメリカで『ウェブスター大辞典』といった大辞書、大事典が次々とあらわれ、さながら辞書の黄金時代といった観を呈した¹⁾。しかし、これらを個別に扱う研究は無数にあるのだが、横断的、総合的に分析したものは少ない。あったとしても、ナシヨナリズム、自国文化の発揚、ロマン主義といった切り口が主流となっている。また、誰がつくったのかという問題についても、マレーやグリム兄弟などの中心人物にのみ注目したものがほとんどである²⁾。

これに対して本稿では、アマチュアの寄与という視点を提示するこ

とで、この辞書の時代というものを統合的に捉えなおしてみたい。これらの辞書・事典には、多数のアマチュアの執筆者、編集協力者が関わっていたのだが、これまでの研究で彼らが注目されることは少なかった。ひとりつずつの素性をたどることの困難さ、アマチュアとして軽視されたことなどによる。しかし、これまで筆者がずっと研究してきた『フーツ・アンド・クエリーズ（N&Q）』誌を見ることで、彼らの素顔に迫ることが可能となる。そしてさらに彼らを総体として捉えることで、辞書の時代の本質に切り込むことが期待されるのである。

現在の日本では、『N&Q』は英文学の専門誌として認識され、日本人研究者による論文も毎号のように見られる。しかし、このように専門誌化したのは第二次大戦後のことであり、それまでは、一八四九年の創刊以来、ずっと文献学、語源、英文学、人物、歴史、フォークロアなどの文系総合誌として発行されていた。また、南方熊楠が一八九九年から一九三三年にかけて、英文論考を投稿しつづけ、

三三四本が掲載されたことでも知られる。なお、筆者の研究の出発点はこちらにある。熊楠が投稿した外国の雑誌としては、『ネイチャー』が有名で、早くから研究もなされてきた。しかし、実は『N&Q』に掲載された論考の数は『ネイチャー』の五〇本と比べてはるかに多く、投稿期間も長期にわたった（『ネイチャー』へは一八九三年（一九一四年）。そして現在、ようやく『N&Q』についても研究が進みつつある^③）のだが、こと投稿者については詳しいことが分かっていなかった。膨大な数の投稿者があり、しかも大部分は「無名」の人物であり、なおかつイニシャルやペンネームのみで寄稿しているケースも多いからである（熊楠にも変名での投稿がある）。しかし、『N&Q』は誌上での読者の質疑応答を目的とした投稿誌であり、投稿者についてなおざりにするわけにはいかない。熊楠の論考にしても、前後の質問や応答と合わせて見なければ、内容をきちんと理解することができない。何らかの方法で投稿者たちの正体を見ていく必要に迫られていたのである。そのための手がかりとして、本稿では、『N&Q』誌に掲載されたオビチュアリ（死亡記事）を取り上げ、分析することにした。オビチュアリには投稿者の履歴、職業等が記され、またペンネームやイニシャルのみの投稿者についても正体が明かされており、彼ら彼女らの実像に迫ることが可能となるのである。

さらに、一九世紀後半から二〇世紀初頭にかけて、イギリス国内外で『N&Q』に類似した雑誌が大量に発行され、そこに投稿する研究者やアマチュアが広範囲に存在し、ひとつの知的空間が構成されていたことが明らかになりつつある^④。こうした知的世界の広がりや、

辞書の時代と重ね合わせてみたい。

本稿の目的は二つある。ひとつは、『N&Q』投稿者の素性を分析して、熊楠研究へと資すること。そして第二に、そこから辞書の時代を支えた知的世界を明らかにすることである。

さて、本論に入る前に、ここで『N&Q』の創刊の事情と、これが読者投稿誌であって、ノート、クエリー、リプライという独特の仕組みを持っていたことについて、簡単に触れておきたい。

『N&Q』は、一八四九年にフオークロア研究者のウィリアム・J・トムズによって創刊された。それに至る経緯は、一八七六年七月一日号から七七年四月二一日号にかけて断続的に掲載された、トムズ自身による回想録から確認される。それによれば、一八四一年頃にロンドンのアマチュアの文人グループで、書物や人物について調べようとしても分からないことが多く、これを解決するために、小さな雑誌をつくって、誌上で質疑応答を行い、広く読者に情報提供を呼びかけようということになった。しかし、即座には実現することができず、とりあえず一八四六年にトムズが『アシニウム』誌に読者の質問欄を設置したところ、大好評となった。これを受けて一八四九年の創刊へとこぎつけたのだという^⑤。なお、その後は二〇世紀半ばまで、ほぼ週刊、二〇頁で出版されつづけることになる。

そして、この雑誌の特徴は、全頁が読者投稿で埋め尽くされていることにあった。誌面は「ノート」、「クエリー」、「リプライ」の三つの欄に分けられる。ノート（短報）は投稿者の発見した知識や情報を提示するもので、現在の学術論文に近いものから、ごく簡単に事例を挙

げたものまで多様である。クエリー（質問）は、読者へ広く情報を求める問いかけのことで、短文が多い。リプライ（応答）は、クエリーへの返答であり、長ささまざまであった。ノートにリプライが付くことも多い。リプライは一本だけでは終わらず、数十人から寄せられ、何年にもわたってつづくことしばしばで、先行するリプライへの訂正が行われたり、議論となることも少なくない。まったくリプライの付かないクエリーもある。

一 オビチュアリ

オビチュアリとは、新聞や雑誌に掲載される死亡記事のことである。著名人等の死に際して新聞社が取材、執筆、掲載する「記事」を指し、誰を載せるかは社側の判断となる。イギリスでは一六世紀に現在の形に近いものがあらわれ、一九世紀半ばに『タイムズ』の編集者であったJ・T・デュレインが紙上で整備し、多くの新聞や雑誌に広がったとされる⁶。なお、同じく新聞に出る死亡広告は、遺族や友人が広告費を支払って掲載してもらう「広告」であり、オビチュアリとは異なる。

本稿の執筆にあたり、熊楠が投稿を開始した一八九九年以降の『N&Q』誌面を調査し、二三六本（二二九人）のオビチュアリを発見した。ひとりの人物に二本のオビチュアリが出た例（速報と詳報など）が七件あるため、数に差が出ている。一九一二年頃までは年間に七十件程度、それから一九三〇年頃までは五〜六件となり、以降は年に

数件で推移していく。なお、英文学の専門誌化していくにつれ、オビチュアリはほとんど見られなくなる。

掲載される場所は、巻末の雑纂欄であり、編集後記、書評、出版案内などに混じって見いだされる。「オビチュアリ」とは明記されない例のほうが多い。形式、内容には統一的な書式はなく、量は五行程度から、一頁を超えるものまである。執筆者もさまざまで、編集部、読者からの投稿、編集部から故人に近い投稿者に依頼したもの、『タイムズ』などの記事を転載した例がある。記事の内容は、下記のうちの、いくつから構成される。名前（イニシャルのみ、あるいはペンネームによる投稿者の場合、ここで本名が明かされる）、家族、経歴、職歴、『N&Q』への主な投稿、初投稿、最後の投稿、著作、死亡地や住所等。一般のオビチュアリと異なるのは、葬儀についての告知がほとんどふくまれない点であり、これは、速報性が低いことと、『N&Q』購読者たちは誌面での知り合いであって、直接の知人ではないため、葬儀には出席しないからと考えられる。

オビチュアリの出る人物は、おおまかに三つのグループに分類される。第一が、著名な投稿者たちである。長年にわたって多数の投稿を行ったり、ある分野で重要な貢献をした人物がこれにあたる。第二は、主要投稿者ではなかったものの、関連分野の重要人物である。後述の『DNB』の発行者のジョージ・スミスなどが挙げられる。そして第三が、一般著名人である。ただし、これは明治天皇のものしか確認されていない。英国の王室関係者等にはオビチュアリが出ておらず、なぜ明治天皇のものが出たのか、現時点では分かっていない。一九一二

年八月三日号に掲載されたもので、文中から『N & Q』関連の事項を拾いあげれば、日本に『N & Q』の投稿者や購読者が何人か存在すること、一八七一年に、当時の発行元であったジョン・フランシス社を日本人訪問者たちが訪れ、編集部を見学し、『N & Q』を一セット持ち帰ったことが記されている⁷⁾。

一方で、主要な投稿者であっても、オビチュアリの出ないケースがある。編集部がその死に気付かない場合である。というのも、遺族や友人が死亡を通知するか、他紙にオビチュアリの出ないかぎり、編集部は知りようがないからである。これはイギリス国内からの投稿者にも当てはまる（主要な投稿者であっても、オビチュアリの発見できない人物が少なくない）が、特に国外からの投稿者に顕著である。熊楠の場合もまさにそうで、彼のオビチュアリは確認されていない。周囲に英語で編集部へ通知できる人物がおらず、また亡くなったのが一九四一年という戦時中であったことも関係しているのだろう。ただし、英語圏であるアメリカやオーストラリアの人物についてはオビチュアリが散見される。また、『N & Q』が次第に英文学の専門誌化していくにつれ、古くからの投稿者は離れ、あるいは忘れられてしまったため、熊楠が後期に議論したような相手、遅く死んだ人物はオビチュアリの出ていない可能性がある。そしてもちろん、購読はしていたものの投稿しなかったり、わずかな数しか投稿していない人物については、オビチュアリは出ない。

さて、このように『N & Q』のオビチュアリは、完全には投稿者の傾向を反映するものではない。しかし、イギリス人主要投稿者につい

ては相当数が確認されているため、同誌を取り巻く世界への手がかりになると考えられる。

それでは、オビチュアリから読み取れることの分析に入りたい。あまりに膨大なため、本稿では全データを示すことはしない。（表一）は、オビチュアリの出た二二九人のうち、名字のイニシャルがAおよびBである三七人について、その生没年、死亡地、職業などを示したものとなる。この表から、投稿者たちの実像を全体的につかみたい。

まず死亡地を見ると、国内各地に散らばっており、投稿者がロンドン、あるいは地方のみに限られなかったことが分かる。職業は、かなり多様であるが、聖職者、法律家、医師、教員、図書館員、出版関係者が目に付く。一九世紀のイギリスで身分的に確立し、激増したとされる知的専門職に従事する人々である。しかし、プロの研究者というべき大学教員は少なく、エドワード・ベンズリー、ジェイムズ・バトラーなど何人かが数えられるだけであり、一般の知識人が趣味として『N & Q』に投稿していた傾向が伺われる。またアンティカリが多いことも指摘しておきたい。アンティカリと明記されているケースのほか、FSA、すなわちアンティカリ協会会員と経歴に書かれている人物も少なくない。アンティカリとはアマチュアの古事物研究者で、遺跡、古銭、地方誌などを調査、収集した。これも当時のイギリスに特徴的なグループであった。なお、アンティカリは職業ではない。個人の「趣味」にあたる部分であり、（表二）に見られるように、彼らは職業としては知的専門職に就いているケースが多い。こうした人々が『N & Q』投稿者の中心をなしていたのである。一方で、女性や外

(表一)

姓のイニシャルがA、Bの
37人を調査

- ①生没年（死亡年）
- ②死亡した場所
- ③職業
- ④アンティカリと明記されているか
- ⑤得意とした執筆分野
- ⑥OED等への寄稿
- ⑦その他（国籍など）

F. Adams

- ①1928 没
- ②ロンドン
- ③教会関係者
- ⑤民俗習慣

William Percy Addleshaw

- ①1916 没
- ②サセックス
- ③法律関係者、小説家
- ⑤詩、小説

Alfred Ainger

- ①1837-1904
- ②ダービー
- ③国教会高位聖職者

Lord Aldenham (Henry H. Gibbs)

- ①1907 没
- ②ロンドン
- ⑤教会建築

Peter John Anderson

- ①1926 没（73 才）
- ②アバディーン
- ③大学図書館員
- ⑤地理、地方誌

Lewis André

- ①1901 没（68 才）
- ②ウェストサセックス
- ④FSA、アンティカリ
- ⑦イギリス人（ジュネーヴ系）

William Andrews

- ①1908 没（60 才）
- ②ハル
- ③出版業、図書館員
- ⑤ヨークシャーほかの地方史

Samuel Arnott

- ①ロンドン
- ②1904 没
- ③国教会

John Christopher Atkinson

- ①1844-1900

- ②ヨークシャー
- ③国教会
- ④アンティカリ
- ⑤地方誌、自然誌

William Edward Armitage Axon

- ①1846-1913
- ②マンチェスター
- ③マンチェスター・ガーディアン紙図書館員
- ⑤文学、地方誌
- ⑥EB、DNBほかの寄稿

Francis Joseph Baigent

- ①1918（88 才）
- ②ウィンチェスター
- ③画家
- ④アンティカリ
- ⑤教会史、風俗習慣、地方誌

J. T. Herbert Bailly

- ①1914 没
- ③雑誌発行者、伝記作者
- ⑤ナポレオン研究

G. F. Russell Barker (G. F. R. B.)

- ①1927 没（78 才）
- ②オックスフォード／ケンブリッジ
- ③歴史家

Francis Rierrepont Barnard

- ①1854-1931
- ②リンカーンシャー
- ③④リヴァプール中世考古学協会会長
フランス・アンティカリ協会員
- ⑤コイン、メダル

Alfred Beaven Beaven

- ①1924 没（77 才）
- ②ウォーリックシャー
- ③学校教師
- ⑤人物
- ⑥DNBに執筆

Edward Bensly

- ①1863-1939
- ②ハートフォードシャー
- ③大学教師（古典学）
- ⑤多分野

R. W. Binns

- ①1901 没
- ②ウスター
- ④FSA
- ⑤ロイヤルウスター（磁器）

Thomas Bird

- ①1900 没（88 才）
- ②ロンドン
- ④アンティカリ、エセックス考古学協会ほか

David Blair

- ①1899 没（79 才）
- ②メルボルン郊外
- ③ジャーナリスト
- ⑤オーストラリア誌
- ⑥『オーストラリアン・サイクロペディア』
- ⑦オーストラリアに渡り、現地から寄稿

Thomas Blashill

- ①1830-1905
- ②ロンドン
- ③建築家
- ④アンティカリ
- ⑤考古学、建築

Horace William Bleackley

- ①1931（63 才）
- ②ローザンヌ（スイス）
- ③文筆家
- ⑤多分野（人物、冒険）
- ⑦イギリス人、スイスで療養

Florence Winifred Say Bloxham

- ①1939 没
- ②ケンブリッジ
- ⑤人物

Frederic Boase

- ①1917 没
- ②イースト・サセックス
- ③ソリシター、図書館員
- ⑤多分野（書誌、文学）

Charlotte Gilson Boger

- ①1903 没（77 才）
- ②ロンドン
- ③牧師夫人

Edward M. Borrajo

- ①1909 没
- ②メルボルン
- ③ロンドンの図書館員
- ⑤図書館
- ⑦スペイン人外交官の息子
オーストラリアで療養

W. G. Boswell-Stone

- ①1904 没（59 才）
- ⑤シェイクスピア

Walter Consitt Boulter (W. C. B.)

- ①1912 没
- ②サリー
- ③法律関係、聖職者、大学研究員
- ⑤人物
- ⑥OED、DNBに寄稿

J. R. Boyle

- ①1907 没
- ②ハル

Henry Bradley（二本。速報と詳報）

- ①1845-1923
- ②オックスフォード
- ③OED編集者
- ⑤英語学、英語史
- ⑥OEDの編集、執筆

T. N. Brushfield

- ①1828-1910
- ②デヴォン
- ③医師
- ④FSA、アンティカリ
- ⑤文学、歴史
- ⑥OEDに寄稿

A. H. Bullen

- ①1920 没
- ②ダービーシャー
- ⑤エリザベス朝研究、古謡

John Malcolm Bulloch

- ①1938 没（70 才）
- ②サセックス
- ③編集者
- ⑤文学、歴史、人物

George Dames Burtchaell

- ①1853-1921
- ②ダブリン
- ④アンティカリ
- ⑤紋章学、系図学

Rachel Harriet Busk

- ①1907 没
- ②ロンドン

Robert Buss

- ①1930 没（69 才）
- ②ロンドン
- ⑤系図学、ミルトン
- ⑦ユグノーの子孫

Marquis of Bute

- ①1900 没

James Davie Butler

- ①1815-1905
- ③ウィスコンシン大学（古典学）
- ⑤多分野、世界各地を旅行
- ⑦アメリカ人

国人が混じっている点は、それにプラスαされる広がりや多様性を示している。以上をオビチュアリから読み取れる投稿者の傾向と結論づけたい。

そして、本稿で注目したいのが、『OED』、『DNB』、『EB』への寄稿者群が認められる点である。デヴィッド・ブレアの『オーストラリアン・エンサイクロペディア』も含めて良いだろう。関連の編纂者、出版者のオビチュアリもいくつか見られる。(表一)にあるヘンリー・ブラッドレーが『OED』の編纂者であったほか、A・Bからは外れるが、同じく『OED』編集者のジェイムズ・マレーとF・J・ファーニヴァル、先述の『DNB』の出版者のジョージ・スミス、さらに夫の死後に版權を引き継ぎ、補遺を出版したスミス夫人が挙げられるのである。以下、本稿の後半では、『N&Q』投稿者と各種辞書、事典の關係を取り上げていくことにする。

二 『OED』

では、『N&Q』投稿者の『OED』、『DNB』、『EB』への寄与について、オビチュアリにはどのように書かれているのか。まず、W・C・B(『N&Q』への投稿は約一八〇〇本)を見てみよう。ずっとイニシャルのみで投稿しつづけた人物だが、オビチュアリで初めて本名のウォルター・コンシット・ブルターが明かされた。法律家、国教会聖職者、大学の研究員などを務め、『N&Q』には一八六四年以来、五〇年近くも投稿し、熊楠と同じ論題にも五回投稿している。

一九一二年二月一七日号に出た彼のオビチュアリには、「…非常に広い学識を備え、多くのことに関心をもった。加えて正確さへのあくなき追求は、『イギリス人名事典』へのいくつもの投稿に如実にあらわれている…」、「彼は長年にわたって『NED』の寄稿者であり、最近では、四半期ごとの『NED』分冊に、…その博識でもって貢献してきた」⁽⁸⁾とある。なお、『OED』は、初期の構想から第一版の出版までは、『ニュー・イングリッシュ・デイクシオナリー』⁽⁸⁾というタイトルであり、『OED』という名称が全面的に使われるようになるのは、一九三三年の補遺(とともに、あらためて全体を十三巻で出版)以降となる⁽⁹⁾。それまでは一般に『NED』と呼ばれ、『N&Q』誌上でも『NED』と表記された。

もうひとりと見ておきたい。W・E・A・アクソン(『N&Q』への投稿は約五三〇〇本)は、マンチェスターで活躍した地方誌家であった。『マンチェスター・ガーディアン』紙の図書館員を長く務め、熊楠と同じ論題にも四回投稿している。一九一四年一月一七日号に出たオビチュアリには、「情報量の豊かな記事を『エンサイクロペディア・ブリタニカ』や、ほかのイギリスやアメリカの事典類に投稿しており、たとえば『イギリス人名事典』が挙げられる」⁽¹⁰⁾と、『EB』と『DNB』への寄稿について書かれている。

では、彼らの貢献、寄稿とは具体的にどのようなものだったのか。以下、本稿では『OED』を中心に取り上げ、検討したい。『DNB』、『EB』については簡単に触れるのみにする。

まず簡単に英語辞書の歴史に触れておくならば、『OED』タイプ

の辞書の前身にはジョンソン博士の辞書がある。それ以前の英語辞書は難解語を中心に収録し、著者自身がその定義を記すというものであった。これをジョンソン博士は、三つの点において改革した。第一が普通語を加えたこと。第二は自身で意味を定義するのではなく、実際の用例を文献から収集、提示することによって語の意味を示すようにした点である。ただし、ジョンソンの場合は同時代的な文献利用にとどまった。第三に、何人もの助手を使うという分業体制を採用したことである。『OED』の場合にも、これらの原則が採用された。ただし、用例を歴史的にさかのぼって示すという点が変更された。また、大陸で先行して出始めたドイツのグリム兄弟の辞書、オランダの『オランダ語辞典』からも影響を受けたとされる。これらもジョンソンの手法を編集方針としたものであった¹²⁾。

『OED』は、一八五七年にロンドンの言語学協会で構想が発表され、R・C・トレンチ(『N&Q』への投稿は一本)、H・コールリッジ(『N&Q』への投稿は三本)、F・ファーニヴァル(『N&Q』への投稿は約二三〇本)の三人が編集役(無給)となり、既存の英語辞書に掲載されていない単語を収集、辞書としてまとめることを目指した。これは翌一八五八年には方向転換され、すべての英単語を包含した辞書をつくることになり、その際に用例を古い英語の文献から集め、意味や語形の変遷を示すという方針が打ち出された。しかし、それには大量の文献を調べる必要があり、数人の編集者では、とても処理することができない。そのためにヴォランティア・リーダーと呼ばれる仕組みが導入されることになった。その名のとおりに、無給で働いてく

れる「読み手」のことで、彼らは編集者から指定された英語の文献に目を通し、語の初出、意味、用例を調べ、クォーテーション・スリッパと呼ばれる用紙に引用文をメモし、編集部に送るよう要請された。そのスリッパを編集者が整理、取捨選択のうえ、辞書に掲載するのである¹³⁾。コールリッジらがヴォランティア・リーダーを募集したところ、一般から約一五〇名が集まった。彼らには担当すべき文献と、スリッパが送られ、作業が開始された。スリッパは白い便箋を二つ折りにしたもので、左上に見出し語、その下に文献の年代、著者、タイトル、そして最後に引用文全体を書き写すことになっていた。

すぐにスリッパも順調に集まりはじめ、順調な滑り出しを見せたのだが、一八六一年にコールリッジが亡くなったことで作業は停滞してしまう。後任となったファーニヴァルの責任とされるが、彼も重要な仕事を二つしている。ひとつが、サブ・エディターの設置である。こちらも無給の有志を募ったもので、アルファベットの一字分ないしはその一部を担当、ヴォランティア・リーダーから送られてきたスリッパを処理して原稿をつくり、編集長にわたす役割を果たした。整理しておく、この段階で編集長、サブ・エディター、ヴォランティア・リーダーの三階梯がつくられたことになる。そしてサブ・エディターとヴォランティア・リーダーは、ほかに仕事を持つなどしながら、自発的に無償で作業に参加していたということになる。もうひとつファーニヴァルが行った仕事は、一八六四年に初期英語文献刊行会を設立し、そこで発行した資料をヴォランティア・リーダーに配付したことであつた。

しばらくの空白期間ののち、一八七六年になってようやく編集作業が再開される。マクミラン社が出版を検討しはじめ、新編集長としてジェイムズ・マレーが登場するのである。マレーはスコットランド出身のアマチュア言語学者で、特に方言研究で知られていた。ほとんど学歴はなく、グラマー・スクールの教師、銀行員などをしながら、言語学協会に所属して研究を行っていた人物である。結局、マクミラン社との話は流れてしまったのだが、一八七九年にはオックスフォード大学出版会との合意がなされ、ついに『OED』は刊行に向けて動き出すことになった。また、この時点でマレーには報酬が支払われることになった。

マレーはミドルセックスのミル・ヒルにあった自邸内に編集資料室を建て、一八七九年三月末に作業を開始し、その際にコールリッジらの集めたスリップを引き継いだ。すでに約二〇〇万枚にのぼっていたが、マレーの目には資料不足と写ったようで、特に頻用語について足りないとして、四月末にあらためてヴォランティア・リーダーを求めるチラシを制作、印刷した。「アピール」として知られるもので、イギリス、アメリカ、イギリス植民地での英語使用者を対象としており、出版社や新聞社を通して配付、公表されたところ、すぐさま反応があり、年内だけで約八〇〇名の応募があった（やがて国内外を合わせて約二〇〇名にまでなる）。イギリスのほか、アメリカ、オランダ、オーストラリア、ニュージーランド、インドからも応募があり⁽¹⁴⁾、日本からの協力者としてジェイムズ・M・デイクソンの名も確認される。東京帝大で英文学を教えた人物で、夏目漱石の師であったこと、軽井

沢が避暑地になるきっかけをつくったことでも知られる⁽¹⁵⁾。彼はまた『N&Q』の常連投稿者でもあり、約五〇〇本の掲載が確認される。

ヴォランティア・リーダーたちは、一般の学究の徒、読書家などであり、自宅や図書館で文献を調べ、得られた情報をスリップに書き込み、マレーの作業場に郵送した。マレーのもとには一日に一〇〇〇枚ほどのスリップが届き、最終的には約五〇〇万枚にのぼったという。これをマレーと助手たちが整理、確認して、辞典への採用、不採用を決めていったのである。ヴォランティア・リーダーたちの貢献は驚くほどで、たとえばT・オースティンは一六万五〇〇〇枚（『N&Q』に二本投稿）、W・ダグラスは二三万六〇〇〇枚（『N&Q』に約一本投稿）という大量のスリップを送った⁽¹⁶⁾。別稿で指摘したように、この背後に、一八四〇年のローランド・ヒルによる普通郵便制度の開始があったことは見逃せない⁽¹⁷⁾。

そして一八八四年二月一日には、ついに第一冊が世に出ることになる。『A-ant』を収め、全三三二頁、売価は一二シリング六ペンス、四〇〇〇部が発行された。その後はゆっくりと刊行が進み、またH・ブラドレー（『N&Q』への投稿は約一一〇本）、W・クレイギー（『N&Q』への投稿は約二〇本）、C・T・アニアンズ（『N&Q』への投稿は約五〇本）が編集に加わっていく（複数の編集長を並立させ、独自に編集を進める体制になる）。そして、一九二八年四月一九日に最終巻（第一二五冊）『Wise-Wizen』が発行され、ようやく『OED』は完成した。計四一万四八二五語、一八二万七三〇六件の用例を収める巨大な辞書には、七〇年以上もの時間と無数の協力者が必要となっ

たのであった。

ここで確認しておきたいのは、『OED』はマレーがすべてを調べてつくりあげたのではなく、ヴォランティア・リーダーやサブ・エディターといった、多くの自発的かつ無償の協力者が集まり、作業を分担することで完成したという事実である。無数の協力者がいたからこそ、これだけ規模の大きい辞書が成立しえたのであった。

三 マレーと『N&Q』

マレーは、『OED』完成前の一九一五年七月二六日に亡くなっている。『N&Q』には、早くも七月三一日号に、かなり長めのオビチュアリが掲載された。そのなかでは、まず「偉大な辞書」への長い賛辞が述べられ、さらに「膨大な数の学究の徒や読書家が、さまざまな形で辞典に寄与したことは良く知られているだろう。…『N&Q』がずっとその作業に参加してきたことを思い起こすのは喜びである。サー・ジェイムズは本誌のクエリー欄でしばしば読者に質問を投げかけた。そして辞典のそこかしこに、投稿者たちから寄せられた変わった用例、珍しい語が収録されたのである」⁽¹⁸⁾と記されている。すなわち、マレーは『N&Q』を情報収集に利用しており、誌面から用例や語が『OED』に採用されていたのである。実際に確認してみると、マレーのこうしたクエリーは、四〇〇本以上にのぼることが判明する。しかも、その多くはクエリー欄の冒頭に置かれており、編集部から重要視され、読者から注目されていたことが分かる。

マレーの初投稿は、一八七九年一月二五日号の「言語学協会のニュー・イングリッシュ・デイクシオナリー」である。署名は「ザ・エディター」とあるのみだが、『N&Q』編集部注記で、マレーの名と連絡先が示されている。この投稿には、『N&Q』の読者のみなさん、言語学協会のニュー・イングリッシュ・デイクシオナリーは、英語のすべての単語について、例文を示そうとするものです。以下の単語のどれでもいいですから、引用例（書名、巻号、頁、版についての正確な参考文献とともに）を送っていただけないでしょうか」⁽¹⁹⁾として、*Atacista* から始まる八〇語ほどが載せられている。つまり、ヴォランティア・リーダー的な役割を、『N&Q』読者へ要請しているのである。なお、挙げられているのは *Atacista* で始まる単語ばかりで、マレーの作業がまだ端緒に付いたばかりであったことが伺われる。これ以降、マレーは誌上で同様のクエリーを繰り返し出していくことになる。

たとえば「クエリー *courier*」というクエリーがある。一八九二年七月二日号に出たものだが、「クエリーエ。これについて、一八三八年以前の、以下のような意味の用例を教えていただければありがたい。旅に同行する召使い、従者。私が考えるに、これはイギリス人がグラインド・ツアーを行うようになってから使われるようになったものであり、一八世紀の関連の書物のなかに見つかるとはならないかと思う。もともとクエリーエは、単にある距離、ある一日だけ雇われた騎手であり、…こうした人物が常雇いになったのはいつだろうか」⁽²⁰⁾と質問している。しかし、これにはリプライは出なかった⁽²¹⁾。実は、マレーのクエリーのかかなりの部分には、リプライが出ていない。また、

一九一三年一月二九日号に出たクエリー「トラム・カー tram-car」の場合には、一月二三日号に W・ジャガードら三人からリプライが出たものの、『OED』には採用されなかった。マレーをうなずかせるだけの用例がなかったのである。このようにマレーのクエリーは空振りに終わることが多かったようである。これは、見つけ出すのが困難な語、用例について、『N&Q』に頼っていたためであろう。マレーは収録する語について、専門機関、専門家に問い合わせることがしばしばで、外国産植物についてキュー植物園に、天文学用語はグリニッジに、文学についてはジョージ・エリオットやロバート・ルイス・ステイヴンソンに訊いたという事実が伝わっている⁽²²⁾。こうしたなかに『N&Q』も含まれていたと考えられる。

もちろん、採用された例もある。一九一三年一月一日号に出た『トラップス traps』では、『トラップス』は日常的には、『所有者が持ち歩くような個人的財産』という意味で使われるが、これは一九世紀になってようやくあらわれたもので、おそらく最初は方言だったのであろう。…方言でもスラングでも文芸上のもので、誰か用例を送ってくれないだろうか。できれば一八二八年以前のものを」⁽²³⁾と問いかけたところ、同月一五日号で J・H・レズリーがリプライを返し、「一八二三年四月四日に書かれた手紙に、『残りはジョリー・キャプテンのシャツや靴下などであり、それからほかに持ちものとして靴がある』という一文がある」⁽²⁴⁾と記した。「持ちもの」にあたる部分が traps である。これはそのまま『OED』に採用されている⁽²⁵⁾。

マレーはこのようにして『N&Q』を『OED』のために利用して

いたのである。なお、マレーには『OED』関連以外の投稿もある。

四 『N&Q』投稿者のなかのヴォランティア・リーダー、サブ・エディターたち

さて、『N&Q』と『OED』の関係は、誌面だけにはとどまらなかった。先に述べたヴォランティア・リーダー、サブ・エディターに、多くの『N&Q』関係者が確認されるのである。

『OED』第一巻の巻頭に掲げられた「ヒストリカル・イントロダクション」の七章二節には、「寄稿者たち」の項目があり、主たるヴォランティア・リーダー二百数十名が出てくる。このなかには『N&Q』投稿者が少なくとも三〇名以上は確認される。熊楠の投稿に関連する名前を指摘するならば、R・D・アーダー、J・フーパー、J・プラット・ジュニア、G・ホワイトラが挙げられる。彼らはヴォランティア・リーダーとして、わりあてられた文献から語と用例をスリップに書き写す作業をしていたものと考えられる。

ただ、J・プラット（『N&Q』への投稿は約四五〇本）はもう少し踏み込んだ仕事を任されていた。彼のオビチュアリを見ると、多数の言語に通じていたことに触れられ、「このように多数の言語を読むこなす人物は辞書の作業に不可欠であり、サー・ジェームズ・マレーも、プラット氏はもつとも役に立つ助手のひとりと認めていた」⁽²⁶⁾とある。このほか、オビチュアリからは、プラットはシティにある父親の羊毛会社で働きつつ、大英図書館に通うアマチュア言語学者であったこと

が分かる。マレーの伝記（孫のK・M・エリザベス・マレーが執筆）などにもプラットは登場しており、しばしばアフリカやアジアの言語について相談にのっていたという⁽²⁷⁾。

つづいて七章二節の「サブ・エディター」の項には、オルデナム卿（H・H・ギブズ）、F・エルワージ、W・W・スキートらが見つかる。この三人については『N&Q』にオビチュアリが出ている。ところが、いずれも『OED』への貢献については触れていない。このことは、オビチュアリに記載のない人物でも、『OED』等の辞書に関わっていた可能性を示している。

まず、オルデナム卿（『N&Q』への投稿は約二〇〇本）から見ていこう。彼は、貿易商・銀行家で、イングランド銀行総裁、シテイ選出の下院議員まで務めた一方で、書物の収集家、文化・学術的事業のパトロンとしても知られた。一八五九年に言語協会に加入し、マレーと屋敷が近かったこともあり、彼の作業を初期から手助けした。サブ・エディターとしてCの項目を担当したほか、初期の校正刷りのすべてをチェックしたという。また、彼はオックスフォード大学に多額の寄付を行い、かなりの影響力を持っていたため、マレーとオックスフォード大学出版会との争いの際にも仲裁者として活躍した。一八八四年に政府からマレーへ年金がおりたのも、彼のおかげであった⁽²⁸⁾。

F・エルワージ（『N&Q』への投稿は約八〇本）は、サマセットシャー在住のアマチュア言語学者で、特にイングランド西部の方言を専門としていた。しかし、植物学、考古学、民俗学等についても詳しく、これらについての著作もある。熊楠とも大英図書館時代に交流があり、

邪眼についての著作は繰り返し熊楠の論考に使われている。マレーとは家族ぐるみで親しかったようで、マレーは休暇を利用して何度もエルワージを訪ねている。エルワージ家で編纂作業を行うこともあったようだ。エルワージは方言の収録において、『OED』に貢献した⁽²⁹⁾。

なお、エルワージ夫人もヴォランティア・リーダーとして活躍した。W・W・スキート（『N&Q』への投稿は約一九〇〇本）もアマチュア言語学者であった。ただし、聖職者、数学教師という他分野の職を経て、一八七八年にはケンブリッジの最初の古英語講座（アーリントン・アンド・ボズワース講座）の初代教授、つまりプロの研究者となっている。そのついでケンブリッジ大学出版会の特別評議会に『OED』出版を打診したが、不成功に終わった。古英語の知識を生かして語源に関する研究を行い、『OED』に貢献したという。クラレンドン・プレスから出た『英語語源辞典』（一八七九〜八二年）は、その副産物とされる⁽³⁰⁾。

このようにして『N&Q』投稿者たちは、さまざまなかたちで『OED』の編纂に協力した。そして、これは以下に見ていくように『DNB』と『EB』においても同様であった⁽³¹⁾。

また、ここで取り上げた四人が、（表一）に見たのと同様の傾向を帯びていることも確認できたであろう。なお、マレーのもとでスリップの整理などにあたった有給の助手についてはアシスタントと呼ばれ、七章三節に別記されている。

五 『DNB』と『EB』

『DNB』は、一八八二年に出版者のジョージ・スミスが発案し、文筆家のレズリー・ステイヴン（『N&Q』への投稿は四本）が編集を担当した。前述のように、スミスおよびスミス夫人（二人とも、『N&Q』への投稿は確認されていない）についてはオビチュアリが出ている。ジョージ・スミスへのオビチュアリには、『DNB』出版という愛国的なアイデアを彼が得たのは一八八二年のことであった。この素晴らしい偉業によって、その名は永遠に不滅のものとなり、また我が国は彼に尽きせぬ感謝を捧げなければならないのだ」⁽³²⁾と書かれている。

ステイヴンはS・リーら若手のジャーナリストや歴史研究者を編集助手として作業を進めたが、基本的に原稿は外部に依頼した。その一覧が『DNB』の冒頭に出ており、『N&Q』関係者としては、W・E・A・アクソン、A・B・ビーヴェン、W・C・B、J・フーパー、G・ノーゲイト、T・E・ページ、J・ヴェンなど二〇名あまりが見いだされる。ただし、彼らがどの項目を担当したかは確認できていない。

マレーと同様、ステイヴンも『N&Q』の誌面を利用して情報収集を行った。一八八三年一月一三日号の『N&Q』巻頭には、「ザ・ニュー・デイクシヨナリー・オブ・ナショナル・バイオグラフィー」と題したステイヴンのノートが掲載されている。「ここで訴えさせていただきます。読者のみなさん、私がいま編集に取りかかろうとし

ている新しい『デイクシヨナリー・オブ・ナショナル・バイオグラフィー』を助けていただけませんか」として、Aの項から収録候補者のリストをつくりはじめていることなどを述べ、「すでに何人もの名声ある歴史の権威たちから助力の約束を取り付けています。しかし、伝記という特殊な分野においては、すべての階級の人物、なかでもあまり知られていない人物についても、きちんと扱いたいのので、できるだけ多くの学究の徒たるみなさんにお手伝いをお願いしたいのです」⁽³³⁾とアピールしている。それ以後も、バイロンとメアリ・チャワースの関係について読者から情報を求めたり（一八八五年三月二十八日号）、W・C・Bのもたらししてくれた情報に個人的な感謝を捧げたりしている（一八八八年一月七日号）。

そして『DNB』は、一八八五年一月一日に第一巻『Abadie-Anne』が発刊されると、以後は季刊で進み、一九〇〇年六月に第六三巻『Wordsworth-Zuytlestein』が出て完成した。

『EB』は、『OED』、『DNB』とは異なり、一八世紀後半にあらわれた事典である。第一版は一七六八〜七一年に全一〇〇分冊で発行された。ただし、これはフランスの百科全書の流れを汲む大項目主義を採用し、学識者ら四〇名あまりによる長大な論文を掲載するものであった。しかし、一九世紀に繰り返された改版のなかで、次第に小項目主義へと移行していき、一八三〇〜四二年に出た第七版からは、イギリス国内外から多数の執筆者を集めて制作されるようになる。さらにT・S・ベインズ（『N&Q』への投稿は一本）が編集長となった一八七五〜八九年の第九版で、徹底的に改訂された。第九版は『EB』

のなかでも「スカラース・エディション」と呼ばれ、もともと項目の

細分化、専門化が進んだものとされる。多くの識者に原稿が依頼され、そのなかに前述のアクソンら『N&Q』関係者が含まれたのである。

アクソンは、「マンチェスター」、「ウィリアム・ロスコー」、「サルフォード」の三項目を担当した。マレーもベインズから依頼されて、「英語」の項を執筆した。『EB』には、巻末に執筆者一覧があり、『N&Q』関係者についていくつか挙げるならば、O・エイリー（『N&Q』への投稿は六本）が、「ウィリアム・ペン」、「ウィリアム・ラッセル卿」、「初代シャフツベリ伯」、「アルジャノン・シドニー」、「ジョン・サマーズ卿」を担当した。W・アームストロング（『N&Q』への投稿は六本）は、「W・Q・オーチャードソン」を執筆した。トマス・アレン（『N&Q』への投稿は約一〇本）は「ホメロス」の一部を担当した。残念ながら、執筆者があまりにも膨大にのぼるため、『N&Q』関係者の何人が協力していたか、いまのところ数字として挙げることはできない³⁴。

なお、『EB』に関しては、『N&Q』誌上での情報収集が行われたようすはない。ベインズの唯一確認されている投稿も、一八六九年一〇月三〇日号に出た、マクベスについてのクエリーで、『EB』との関係はないようである。

以上から、『DNB』と『EB』が、ともに『OED』と同様の傾向を持つことを確認できたであろう。

六 考察

本稿では、まず『N&Q』常連投稿者の素性を示し、つづいて一九世紀後半〜二〇世紀に出版された辞書・事典類に、多くの『N&Q』関係者が協力していたことを明らかにした。しかし、本稿の目的は『N&Q』の偉大さを顕彰することにはない。そうではなく、これらを同代的な総体として理解したいのである。

第一点として、『OED』は、マレーが個人でつくりあげたものではない点を指摘したい。彼が行ったのはあくまでも編纂であって、知識や情報の調査と提供は、ボランティア・リーダーというアマチュアたちが中心になった（そのなかに少数のプロも含まれた）。最初に述べたとおり、これまでの研究では、ヴォランティア・リーダーなどのアマチュアは軽視されがちであった。しかし、彼らなしには『OED』は成立しなかったのである。

第二に、彼らは単なるアマチュアではなかった。このことは『N&Q』のオビチュアリを見ることで確認された。その人物、職種、興味や関心等について、（表一）および各所で提示したとおりである。ここからは、彼らはたしかに大学等の研究機関に所属するプロではなかったが、市井にありながらも、知識を蓄え、調べ、提供することのできる知的な人々であったことが分かる。そもそも、マレー自身も大学の教員や銀行員を務めていた。あとを継いだブラドレーも、マレーの助手になるまではシェフィールドの刃物会社の通信係であった。すな

わち編集者自身もアマチュアだったのである。実際のところ、上から下まで、『OED』はすべてアマチュアがつくったものとする言えるのではないだろうか⁽³⁵⁾。そして、彼らの辞書への参加の仕方はさまざまであった。ヴォランティア・リーダーとしてスリッパを送りつけたものもいれば、マレーのすぐそばでサブ・エディターとして働いたものもいる。そして忘れてはならないのは、刊行された『OED』を購入し、実際に辞書として使用したひとたちも、その少なからぬ部分が生井のアマチュアだったはずだということである。

第三に、『OED』で確認した状況は、ほかの辞書・事典類にも敷衍される。『DNB』や『EB』も、多くのアマチュアが参加してつくられたものだったのである。しかも、『N&Q』の投稿者において確認したように、その層は重なり合っていた。有用な知識を持つ人物であれば、複数の辞書・事典に参加するのは普通のことだったのである。一見、『OED』や『DNB』は、まったく別分野の成果のように見える。しかし、これらは独立に発生したバラバラな存在ではなく、ひとつの知的集団にベースを持つ、密接に結びついた一連の結実だったのである。

本稿では、『N&Q』を中心にして、そこから『OED』や『DNB』、『EB』へという道筋で論じてきた。しかし、これらは上下関係にあるのではなく、並列関係として理解されるべきである。『N&Q』投稿者のうち、『OED』に参加したのは一部に過ぎず、あるいは『DNB』執筆者のすべてが『N&Q』投稿者であったわけでもない。しかし、これは当然のことであろう。むしろ、これらを包含するような

世界を想定したのである。当時のイギリスには知的なアマチュアが広範囲に存在しており、そこに何らかのきっかけが与えられたことで出現したのが、たとえば『N&Q』であり、『OED』だったと考えられるのではないだろうか。これらの土壌にあたる部分、全体的な世界を明らかにするのが、私の最終的な目標なのである。

そして最後に、大辞典の時代について考えてみたい。まず、『N&Q』は、もともと人物や書物について問い合わせるための雑誌として出発した。これは、その当時すでに充実した辞書、百科事典、人名事典、ビブリオグラフィなどがそろっていれば、必要なかったはずである。しかし、それがまだなかったゆえに『N&Q』がつけられた。知りたいことをクエリーで質問すれば、誰かがリプライで答えてくれる。質問の内容は人物でも書物でも言葉でもフォークロアでも良い。つまり、『N&Q』は一種の百科事典と位置づけられるのである。そして、同様の要請、すなわち細かな知識や情報への必要や欲望が、『OED』や『DNB』を編纂させ、『EB』を小項目化させたのではないだろうか。それがすなわち大辞典の時代ということなのである。

結論としてまとめれば、一九世紀半ばから後半にかけてのイギリス（+a）では、アマチュアの人々（そのなかにプロの研究者や知識も包含される）によって知識が集積されており、同時に、それらの知識を一箇所にまとめ、誰もが簡便に利用できる形で公開したいという欲望が存在した。そして、『N&Q』が発刊されると多くの人々が購読者となり、『OED』が企画されれば無数の編纂協力者があらわれるなどして、やがて各種の辞書・事典が出版される。これらは同じ土壌

から咲いた違う色の花々なのである。

注

- (1) Jonathan Green, *Chasing Sun: Dictionary-Makers and the Dictionaries they made*, Henry Holt, 1996.
- (2) K. M. Elizabeth Murray, *Caught in the Web of Words: James A. H. Murray and the Oxford English Dictionary*, Yale University Press, 1977, p. 340.
- Lynda Mugglestone, 'Pioneers in the Untrodden Forest: the New English Dictionary, in *Lexicography and the OED: Pioneers in the Untrodden Forest*, ed. by Mugglestone, Oxford University Press, 2002.
- Noel Osseon, 'Murray and his European Counterparts', in *Lexicography and the OED*.
- (3) 熊楠の著作は、英語・日本語を問わず、論考と呼ばれることが多い。現在の学術的な論文とは、あまりにもスタイルが異なるためである。テキストは『N&Q』本誌およびオンライン版を用いた。人名、投稿本数等については、『N&Q』のインデックス、オンライン版ともにかのり脱落があるため、文中で挙げた数字は概数となる。『N&Q』の巻号数については、原則として発行日を示した。
- 『N&Q』についての研究は、以下を参照されたい。
- ・拙稿「南方熊楠と『フーツ・アンド・クエリーズ』誌―Footprints and Gods, &c.―から「ダイタラホウシの足跡」へ」『ヴィクトリア朝文化研究』七二〇〇九年。
- ・『定訳 南方熊楠英文論考（フーツ・アンド・クエリーズ）誌篇』集英社、二〇一一年出版予定。
- (4) 拙稿「フラヘン・エン・メデーリンゲン」誌と南方熊楠―『フーツ・

アンド・クエリーズ』誌から派生した雑誌群の分析へ向けて」『歴史文化社会論講座紀要』七二〇一〇年。

- (5) William John Thoms, 'The Story of "Notes and Queries"', *N&Q*, July 1, 1876, pp. 1-2, July 15, 1876, pp. 41-42, Aug. 5, 1876, pp. 101-102, Sept. 16, 1876, pp. 221-222, Jan. 6, 1877, pp. 1-2, Mar. 24, 1877, pp. 222-223, April 21, 1877, pp. 303-305.
- (6) Bridget Fowler, *The Obituary as Collective Memory*, Routledge, 2007.
- (7) *N&Q*, Aug. 3, 1912, p. 100.
- 明治天皇のオビチュアリが出たのは、熊楠が常連投稿者であったことと関係があるかも知れない。ただし、編集部明治天皇の死を知らせたのが熊楠であった可能性は低い。
- (8) *N&Q*, Feb. 17, 1912, p. 140.
- (9) 正確なタイトルは、*A New English Dictionary on Historical Principles founded mainly on the Materials collected by The Philological Society* である。
- (10) 厳密には、一八九五年一月一日発行の分冊 (Decet-Deject) から一部の表記にあらわれている。
- (11) *N&Q*, Jan. 17, 1914, p. 60.
- (12) Osseon, 'Murray and his European Counterparts'.
- (13) トレンチは、このアイデアの源がグリム兄弟の辞書にあると発言している。ただ、彼らは八三人のヴォランティアの助手を使ったものではなく機能しなかったとされる。John Willinsky, *Empire of Words: the Reign of the OED*, Princeton University Press, 1994, pp. 27, 42.
- (14) *OED*, vol. 1, Oxford University Press, 1933, pp. xxi-xxiii.
- (15) デイクソンの弟子であったことから、夏目漱石の参加していた可能性も指摘されている。上野景福「誕生の背景からみた英米の辞書の特色」『英語の辞書』アルク社、一九八〇年、三六―三七頁。
- (16) *OED*, vol. 1, pp. xxi.

- (17) 『南方熊楠英文論考(ノーツ・アインド・クエリース)』誌篇』解説。
- (18) *N&Q*, July 31, 1915, p. 92.
- (19) The Editor (Dr. Murray), "The New English Dictionary of Philological Society", *N&Q*, Oct. 25, 1879, p. 329. 太字は原文ではイタリック。
- (20) J. A. H. Murray, 'Courier', *N&Q*, July 2, 1892, p. 7.
- (21) それでも『OED』には『マニエール・レジスター』から、一七七〇年にドーセット公がクーリエを連れてナポリに到着したという用例が示されている。*OED*, vol. 2, p. 1086.
- (22) K. M. Elizabeth Murray, *Caught in the Web of Words*, p. 300.
- (23) J. A. H. Murray, "Traps", *N&Q*, Nov. 1, 1913, p. 347.
- (24) J. H. Leslie, "Traps", *N&Q*, Nov. 15, 1913, p. 394.
- (25) *OED*, vol. 11, p. 288.
- (26) *N&Q*, Feb. 12, 1910, p. 140.
- (27) *N&Q*, Feb. 12, 1910, p. 140. / K. M. Elizabeth Murray, *Caught in the Web of Words*, pp. 307-308. / Lynda Mugglestone, *Lost for Words: the Hidden History of the Oxford English Dictionary*, Yale University Press, 2005, pp. 192-193.
- (28) *N&Q*, Sept. 21, 1907, p. 240. / K. M. Elizabeth Murray, *Caught in the Web of Words*, pp. 206-211. / Mugglestone, *Lost for Words*, pp. 32-33, 41-42.
- (29) *N&Q*, Dec. 21, 1907, p. 240. / K. M. Elizabeth Murray, *Caught in the Web of Words*, pp. 77-79.
- (30) *N&Q*, Oct. 12, 1912, pp. 299-300. / K. M. Elizabeth Murray, *Caught in the Web of Words*, pp. 83-86. / Mugglestone, *Lost for Words*, pp. 26-27, 48-51.
- (31) そもそも言語に関する辞書と、百科事典的なものとの差異についても考慮する必要がある。たとえば、初期の英語辞書のヘンリー・コッカイトの *The English Dictionarie* (一六三三年) などは、第一部と第二部が英語辞典、第三部が百科事典的なものであった。こうした傾向はウェブスターにも引き継がれ、一般にエンサイクロペディック・ディクショナリーと呼ばれている。固有名詞、動植物、科学技術用語などを図入りで解説するようなタイプのものである。なお、『OED』にはそうした傾向はまったくない。小島義郎「英語辞書物語―時代を創った辞書とその編者たち」上、*ELEC* 一九八九年、八六―八八頁。
- (32) *N&Q*, April 13, 1901, p. 300.
- (33) Leslie Stephen, "The New Dictionary of National Biography", *N&Q*, Jan. 13, 1883, p. 21.
- (34) 熊楠は『N&Q』に『EB』の誤りを指摘する論考を二本寄せている。一九〇七年三月二日号に出た 'Mohammedanism in Japan' では、日本にイスラム教徒が分布するとの記述を指摘し、一九一三年九月六日号に出た 'A Slip in "The Encyclopaedia Britannica"' では、日本の「湖と滝」の項で滝についての記述がまるまる欠落していることを指摘した。これらはいずれも次の版では修正されているが、はたして熊楠の指摘によるものなのかは調査中である。
- (35) 『OED』が「英語」の辞書であったという点にも言及の必要があるだろう。当時、次第に英語・英文学の地位が向上しつつあったとはいえず、依然として重要な言語はギリシャ語やラテン語であった。それらに比べて英語には専門の大学教員も少なく、軽視されがちであり、だからこそ、これといった学歴や肩書きも持たないマレーが編纂者となり、多くのアマチュアが参加できたのである。